

想定外を生き抜く力

～大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的な行動に学ぶ～

群馬大学大学院教授
 広域首都圏防災研究センター長
 片田 敏孝

1. 東日本大震災は「やむをえない」出来事だったのか？

およそ2万人に上る死者・行方不明者を出した東日本大震災。犠牲者の死因のおよそ9割が津波による溺死だと言われている。津波の破壊力のすさまじさを前に、人はあまりにも無力であった。そのためか、今回の津波を「想定外」とする傾向が見受けられる。

これらの状況を踏まえ、東日本大震災を改めて振り返ると、およそ2万人という膨大な数の犠牲者が発生しているにもかかわらず、「想定外であり、やむを得なかった」で片付けてしまうことは間違っていないか。そもそも、事前の十分な対策と津波襲来時の十分な対応はできていたのか。その上で「やむを得なかった」ということなのか。私には疑問に思えてならない。

このような状況にあって、私が小中学生の津波防災教育に携わっていた釜石市では、学校管理下になかった5名の児童・生徒を除いて、市内の全小中学生およそ3,000人が全員無事に生き延びた。このことは、テレビや新聞の報道では「釜石の奇跡」と呼ばれた。

そこで、今回の大津波災害の背景にどのような問題が潜んでいるのか、また、その中で今回の「釜石の奇跡」はどのように成し遂げられたのかについて、考えていきたい。

2. 想定にとられすぎた防災 ～二つの意味での「想定」～

「想定外」ーテレビや新聞などで何度も見聞きした言葉である。何気なく使っている言葉であるが、そもそも「想定」とはいったい何なのだろうか。

自然災害に関する「想定」については、二つの意味で捉えるべきである。一つは、相手は自然であり、あらゆることがあり得ると考えた場合の「想定」である。今回の大津波災害も、大いなる自然のふるまいの一環として捉えれば、この「想定」の中に含まれるといえよう。

しかし、防災における想定を、何でもあり得るといった自然の営み全ての範囲で捉えると、その想定に対しては「対応不能」という事態もたくさん生じてしまう。そのため、防災においては、ある一定の災害の外力レベルを設定し、その想定したレベルを目標にして防災施設等を整備している。すなわち、そこには「防災における想定」という考え方が存在する。

津波の場合は、確かな記録に残る既往最大の津波を想定外力の規模として定めている。三陸沿岸では、それは1896（明治29）年の明治三陸津波および1933（昭和8）年の昭和三陸津波ということになり、これらのレベルの津波に耐え得る防潮堤や防波堤などの施設整備を行ってきた。今回の大津波はその想定外力を超えたということであり、そういう観点からいけば「想定外」だったということになる。

しかし、相手は自然であり、あらゆることがあり得るのだから、想定内・想定外という議論は不毛である。今回の大津波災害においてこのような議論が展開されるのは、津波が防災における想定レベルをはるかに超えるものだったからである。

では、「防災における想定」を超えたのであれば、「想定が甘かった」ということになるのか。実は、我が国は「災害大国」と称される一方で、世界に名立たる「防災大国」でもある。宮古市田老地区には、40年以上の歳月をかけて造られた、総延長2,433メートル、海面高さ10メートルの「万里の長城」と言われるほどの長大な防潮堤がX字型に二重に整備されていた。釜石湾には、30年の歳月と1,200億円かけて整備した、海底63～海面上6メートルまでのおよそ70メートルの高さをもつ、ギネスブックにも登録された湾口防波堤がそびえていた。このレベルで防災を実施している国は世界広しといえどもそうはない。これらの防潮堤や防波堤は破壊されはしたものの、市街地に流入する津波の規模を抑制し、また市街地への到達時間を遅らせることで避難のための猶予時間を与え、被害軽減のために少なからぬ貢献をしたことも事実である。これだけの防災施設を整備していてもなお、「想定が甘かった」「想定をもっと上げなければならない」というのであれば、それはあまりにも短絡的な考えであると言わざるを得ない。

では、今回の大津波災害で、我々はなぜここまで大きな犠牲を払わなければならなかったのか。それは、「想定が甘かった」からではない。行政も住民も、そして専門家も含めて「想定にとらわれすぎた」という「落とし穴」があったと言ってよかろう。

3. 津波から生きながらえるための「避難3原則」

繰り返しになるが、我が国の防災が反省すべき点は、「想定にとらわれすぎていた」ことである。相手は自然であり、時に大きな振る舞いを見せる。そんな中でも、想定にとられることなく、最善を尽くして避難することが大切である。釜石の子どもたちへの防災教育では、これらを「避難3原則」として教えてきたので、具体的に見ていきたい。

(1) 想定にとられるな

端的に言えば、「ハザードマップを信じるな」ということである。最初にハザードマップを子どもたちに見せると、自分の家や学校が浸水域にかかっているかどうかによって一喜一憂するのが聞こえてきた。私は子どもたちに、「君はこのハザードマップを見て、『学校が浸水域の外にあるから安心だ』と言っていたが、相手は自然なのだから、この次の津波はこの通りに来るとは限らない。そう考えると、仮に学校が浸水域から外れていたとしても、大丈夫と考えるのは危険ではないか？だから、想定にとられてハザードマップを完全に信じてはいけないんだ」と説明した。子どもたちに自らが想定にとられていることを自認させること、そして、相手は自然であり、時として、人間の勝手な想定にとどまるものではないことを理解させたかったからだ。

(2) その状況下において最善を尽くせ

『ここまで来ればもう大丈夫』と考えるのではなく、そのときできる最善の行動をとれ」ということである。ここでは、今回の地震発生時に釜石東中学校の子どもたちが取った行動を紹介したい。

まず、地震で揺れている最中から、校庭で部活動をしていた生徒たちが、「津波が来るぞ、逃げろ！」と校舎に向かって大声で叫びながら校庭を駆け抜け、予め避難場所に指定していた老人介護施設「ございしょの里」を目指して避難を始めた。中学校の他の生徒もこれに続いた。隣接する鶴住居小学校の子どもたちは校舎の3階に避難していたが、日頃から中学生と一緒に避難する訓練を重ねていたので、中学生が一斉に避難する様子を見て校舎を駆け下り、その後続いた。

一行は「ございしょの里」に到着したものの、建物の脇の崖が崩れかけている様子や、津波が防波堤

にあたって舞い上がる水しぶきを見て、中学生らが、さらにその先にある老人福祉施設へ避難することを提案した。無事全員が老人福祉施設に避難し終えたわずか 30 秒後、津波は老人福祉施設の目前まで迫り、そこで止まった。一行はギリギリのところまで全員助かった。最初に避難した場所でよしとせず、そのときできる最善を尽くして次の避難場所へ移動したことが、一行の命を救ったのだ。

(3) 率先避難者たれ

「もし、『その時』が来たら、まず自分の命を守り抜くことに専心せよ」ということである。子どもたちには、「人間はいざというときに、逃げるという決断がなかなかできない。でも、誰かが逃げるとそれにつられて群集心理が働き、みんなが逃げることにつながる。君が自分の命を守ることは、周りの人たちの命を救うことになるのだ。だから、君がまず逃げるんだ」と教えてきた。

今回の大津波災害においても、大声で叫びながら全力で駆けだした中学生たちが小学生を巻き込み、大挙避難する子どもたちの姿を見て、住民の多くも避難を始めた。子どもたちは文字通り『率先避難者』となり、周りの大人たちの命をも救ったのだ。

4. 災害に柔軟に対応できる「姿勢」を与える防災教育

今回、釜石の子どもたちは、見事な対応を見せてくれた。彼らがこのような行動をとることができた背景には、彼らに対して実施してきた防災教育の手法が、従来とは異なる手法であったことが大きく作用していると考えている。

では、従来の防災教育とどう異なるのか。私は、防災教育には、3つの手法があると考えている。一つは「脅しの防災教育」。過去にこんな怖ろしいことがあったという恐怖の喚起によるものであり、従来の防災教育がまさにこれに当たるが、これは何の効果ももたらさない。なぜなら、人間は怖ろしいという気持ちをずっと持ち続けることはできないからである。さらに、「釜石は過去にこんな災害があつてとても怖いところなんだ」と言い続ければ、子どもたちは釜石の街を嫌いになってしまう。私は、「釜石はすごくいい街だが、この豊かな海の恵みをもらい続けるためには、時々自然の大きな振る舞いにも付き合わなければいけない。でも、数十年に1回、そのときが来たら避難する姿勢を持っていればいいだけで、何も心配する必要はない。それは海の恵みを受け続けるための『お作法』なんだ」と、子どもたちに語りかけていった。そうすれば、子どもたちは「釜石はこんなにいい街で、ここに住み続けたいからこそ、学んでおくべき防災の対応なんだ」と捉えてくれる。

二つ目は「知識の防災教育」。例えば、ハザードマップを配って、「浸水が想定されている範囲の人は気をつけましょう」と教えるといった具合である。しかし、それでは災害イメージの固定化を招き、その人が想起する最大値を固定してしまうという問題がある。浸水想定区域の内側に住む方は厳しい条件の中でも避難するが、外側に住む方は安心して避難しない。その結果、今回の大津波災害では、浸水想定区域の外側に住む方がたくさん犠牲になるというあべこべな事態が起こるのである。

では何が重要かという点、「姿勢の防災教育」であると考えている。子どもたちに伝えたのは、津波の知識や恐怖ではない。自分の命を守ることに主体的であり、できる限りの最善を尽くすという姿勢の重要性を説いたのだ。

5. 「津波てんでんこ」の真意を再考する

釜石の子どもたちに行ってきた「姿勢の防災教育」の集大成として、津波防災教育の授業の最後に、私は子どもたちに次のように問いかけた。「君たちは教えたとおりに逃げてくれると思うが、君が逃げた

あと、お父さん、お母さんはどうするだろう?」。すると、子どもたちの表情は一斉に曇った。お父さんやお母さんは自分を心配して迎えに来て、その結果どうなるかということも想像できるからだ。

私は続けてこう話した。「今日家に帰ったら、『いざというときは僕は必ず逃げるからね』と、信じてくれるまでちゃんと伝えるんだ。お父さんやお母さんは、君たちが逃げてくれると信じられなければ、きっと迎えに来てしまうよ」。一方、父兄に対しても「お子さんが『津波が来るときには、僕は必ず逃げるから』と言うと思う。しっかり子どもたちの訴えを受けとめ、『この子は絶対に逃げてくれる』という確信がもてるまで、子どもの話を聞いてあげて欲しい。そして、確信が持てたら、『わかった。ちゃんと逃げるんだよ。お母さんも逃げるからね。あとで必ず迎えに行くからね』と言葉をかけてあげて欲しい」と話した。

三陸沿岸には「津波てんでんこ」という言い伝えがある。津波のときはてんでばらばらに逃げないと家族や地域が全滅してしまうという教訓だ。家族それぞれがいざというときの行動を決めておき、お互いが避難していることを信じ合えていれば、余計な心配が悲劇を生むことなく、自らの命を守ることに専念できる。

今回の震災後、私は釜石に何度か足を運ぶ中で、お父さんやお母さん方に声をかけられた。私が「お母さんは逃げられましたか」と聞くと、「うちの子は『津波が来たら僕は絶対に逃げるから』と、普段から言っていました。だから、私も『うちの子は津波が来ても、絶対に無事に逃げている』と信じて逃げました」と話してくれた。「津波てんでんこ」の教えが、子どもを介して大人にまでちゃんと行き届いていたのだ。「自分の命に責任を持つだけでなく、それを家族が信じあっている、そんな家庭を築いておけ」。これが、「津波てんでんこ」の真意ではないだろうか。

6. 「社会対応力」で想定外を生き抜く

釜石の子どもたちは、想定を超える災害に対しては、ハード施設に依存せず「社会対応力」で備えることの重要性を我々に教えてくれた。これらのことが「地域知」として常識化され文化となり、世代間に受け継がれていくことが重要である。それは、一人一人が災害に対する賢さを備えた真に強い社会を形成し、想定外を生き抜いていくということにほかならない。